

世界市民明石塾における生命に関する青年の声明

2019年8月8日

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにて

1. 前文

我々関西学院世界市民明石塾に参加した30人の高校生は、2019年8月6日から8月8日にかけての3日間、明石塾長並びに関西学院大学の教員、池上彰氏、その他講師の指導の下で、生命(いのち)をテーマに、SDGs 目標2「飢餓をゼロに」、目標3「すべての人に健康と福祉を」、目標6「安全な水とトイレを世界中に」についての検討を重ね、知識を深め、議論を繰り広げてきた。

我々は21世紀を担うグローバルリーダーとして、変化する社会において、各国の文化を尊重しながら、未解決の諸問題に対して私たち若者が新たな視点から解決の糸口を提案し、「誰も置き去りにしない世界」を実現していかなければならない。解決には持続的な取り組みと、解決への強い意志、理念を後世へと引き継いでいくべきである。その意思表明をここに記す。

2. 現状認識

我々は、生命(いのち)に関する地球的課題について、以下の現状を把握した。すべての人の健康や生命維持は世界の発展に欠かせない。また、精神的・身体的健康を求めることは、私たちが生きるための最低限度の権利である。

しかしながら世界には様々なことが原因で生命を落とす人がたくさんいる。例えば飢餓による日常的な空腹と栄養失調や過剰な労働、医療技術の未発達、汚染水・不衛生なトイレなどが原因である。

その改善のために、SDGsの目標2,3,6の早期の達成が求められる。

3. 問題分析

上記に述べた問題の根本的な原因として、経済格差、気候変動、紛争、生活環境があげられる。それを解決するためのインフラや技術支援が政府や民間企業によって整えられていない。これら3つの問題は、互いに影響を及ぼしている。それらの直接的要因として、戦争や紛争、政治的抑圧、経済制裁などがあげられる。また、構造的な要因として、貧困や気候変動、女性などへの差別があげられる。

さらには教育の機会が不足していることにより、発展途上国の人々の生活が低迷している。その結果、社会的に立場の弱い人への不平等が生じる社会構造が生まれている。

これら全体に共通することとして、人々のSDGsへの認識の低さが懸念される。

4. 提言

世界市民として我々は、固定観念によって相手を判断するのではなく、互いを思いやり、積極的な姿勢を保ち、相手の立場に立って思考する精神を持つことが必要である。

SDGsの目標2,3,6は生命にかかわる問題だ。満足に教育を受けられないと貧困の連鎖は断ち切れず、国は発展していかない。そこで、教育がこれらの問題を解決する鍵だと考える。特にSDGsへの認識を高めることに力を入れるべきだ。具体的には、水道や医療などの衛生的なインフラ整備の必要性、予防に関する教育や対処などについて私たちは啓発をしていかなければならない。こうして、私たちは社会を根本から変えていくべきである。

そのために世界中の人々全員が同じ地球で共存しているということを認識してもらうことが大切である。私たち21世紀の若者は20世紀の負の遺産を、次の世代に残さないためにも努力し続けていくことをここに宣言する。